

文明・作法・大陸旅行：ジョン・ロックとシャフツベリの対話

木村，俊道
九州大学大学院法学研究院助教授

<https://doi.org/10.15017/16438>

出版情報：政治研究. 52, pp.25-55, 2005-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：

文明・作法・大陸旅行

—— ジョン・ロックとシャフツベリの対話 ——

はじめに — 政治と思想の間 —

第一章 初期近代イングランドの大陸旅行論

第一節 ルネサンス期の大陸旅行論

第二節 一七世紀の大陸旅行論

第二章 「文明の作法」 — ジョン・ロックとシャフツベリの場合 —

第一節 ロックとシャフツベリの「交際」

第二節 ロックにおける「文明の作法」論

第三章 「文明の作法」の危機

第一節 外面と内面の乖離

第二節 イングランド意識の昂揚

第四章 リチャード・ハードの大陸旅行論

第一節 ハードの対話編

第二節 「ロック」と「シャフツベリ」の対話

むすびにかえて

木村俊道

Your gentleness shall force, more than your force move us to gentleness (Shakespeare, *As You Like It* 2-7).

If a Man be Gracious, and Courteous to Strangers, it shewes, he is a Citizen of the World; And that his Heart, is no Island, cut off from other Lands; but a Continent, that joynes to them (Francis Bacon, *Of Goodness and Goodness of Nature*).

人の相交るは有無相通じ短長相補ふ所以に外ならず。……人の相交るは互いに礼あるを要す。礼なるものは元と乱を防ぐのみ。好客を敬して之を上席に引く固より礼なり。乞人を叱して之を外庭に拒む、亦た礼ならずんばあらざるなり。……是れ亦た交際の礼にあらずや。要は各々『我』を保ちて相乱れざるに在り(陸羯南「増補再版国際論自序」)

はじめに—政治と思想の間—

本稿の目的は、初期近代イングランドの大陸旅行論を検討する作業を通じて、同時代における「文明の作法」の浸透と衰退の過程を説明することにある。以下ではまず、議論の導入として、「作法」の政治思想的な意義を考えてみたい。

本稿では、「作法」を、他者との共存をはかるために編み出された一連の行動の「型」であると仮定する。それはまた、具体的な生活世界のなかで反復実践されるものであり、それゆえ、日常性と身体性を特徴とする。このような作法の体系は、一般に、秩序の形成を強く志向する。したがって、そこに権力や支配の契機を看取することは容易である。しかしながら、作法による行動の定型化がまた、以下のような「開かれた」側面を有することも見逃すことはできない。

政治の世界において、確立された一連の作法は、暴力と感情の噴出を抑制する機能を果たす。それは、政治における恣意性を排除する。また、行動が様式化され、予測可能性が生じることによって、他者の参入も容易になる。エチケットはチケツトになる。他方で、政治は高度な作為の世界となり、常に他者の視線にさらされる。ここでは、アクターによる自覚的な役割演技が必要とされるであろう。

ヒュームの指摘にもあるように、政治の世界はまた、思想や意見によって成立する。しかしながら、良心や信条、教義やイデオロギーはしばしば共約不能である。これに対して、作法はあくまでも外面的な行動の型であり、内面からは切り離され、価値中立的である。もともと、作法それ自体もまた、特定の思想的・社会的条件の産物であることも間違いない。しかしながら、作法の共有が、相互の意思の伝達を容易にし、多様な意見の間に折り合いをつける一つの手段であることもまた否定できない⁽²⁾。

このように、作法はいわば政治と思想を媒介し、暴力と感情を抑え、日常的な他者との交際を可能にする身体的なツールである。歴史的に見れば、たとえばN・エリアスが指摘したように、このような一連の作法の成立によって、産業化以前における初期近代ヨーロッパの「文明化」が促進されたのである⁽³⁾。

イングランドの場合、この「作法」を意味する語彙群として、*courtesy, civility, politeness, manners, etiquette*等が挙げられる。それぞれ、宮廷、都市、ポリス、方法、ラベルを語源とする。いずれもヨーロッパ大陸、とくにフランスからの外来語である。なかでも、*civility (civilité)*は「文明」と同義であり、産業革命後に定着する*civilization*と対比した場合、初期近代における「作法」と「文明」の連関を鮮やかに示している⁽⁴⁾。別稿で述べたように、とくにルネサンス期においては、イタリアやフランスなど、大陸の宮廷が文明の発信源であった。これに対して、辺境の後進国イングランドでは、カステイリオオーネの『宮廷人』やグアッツォの『洗練された交際』、デッラ・カーサの『ガラテオ』をはじめとする大陸の作法書が次々に翻訳され、少なくとも一八世紀に至るまで受容され続けたのである⁽⁵⁾。

本稿では以下、初期近代イングランドにおける「文明の作法」(= *civility*)を説明する作業の一環として、作法書の伝統に加え、同時代の大陸旅行論に着目する。この大陸旅行(グランド・ツアー)⁽⁶⁾は、ともすれば「英国貴族の放蕩修学旅行」として、その思想的な意味は看過されてきた。しかしながら、いうまでもなく、大陸旅行は同時代における政治エリート教育の仕上げであった。それはまた、文明の発信源である大陸の宮廷を巡る旅でもあった。ジェントルマンの子弟は、異質な他者との交際を通じて、たんに知識や経験を深めるだけでなく、「文明の作法」を身体化することを期待された。以下本論では、ジョン・ロックやシャフツベリも加わった大陸旅行論の展開を追跡し、初期近代イングランドに

おいて、他者との共存を可能にする実践知が培われていた可能性を明らかにする。そのうえで、このような「文明の作法」の衰退とともに、新たに「デモクラシー」と「ナシヨナリズム」が歴史の舞台に登場したことを示唆したい。

第一章 初期近代イングランドの大陸旅行論

第一節 ルネサンス期の大陸旅行論

一六世紀前半、イングランドは一五三四年の国王至上法によって、ローマ・カトリック教会という「普遍」世界から離脱する。しかし、このことは大陸との交流が途絶えることを意味しなかった。当時の大陸は文明の中心であり、とくにイタリアはルネサンスの爛熟期にあった。人文主義的教養の修得が不可欠とされたジェントルマンにとって、古典古代の文化が再生した大陸は政治エリート教育の場であった。⁸⁾以下本章では、ルネサンス期から一七世紀にかけての大陸旅行論を踏査し、その内容と性格を明らかにしてみたい。

たとえば、ルネサンス期を代表する人文主義者リプシウスは、一五九二年に翻訳された『旅行者の手引き』のなかで、旅行の利点として、「知恵」と「知識」の獲得を挙げた。彼によれば、ユリシーズの知恵、プラトンやピタゴラスらの知識は、まさに旅行の経験を通じてこそ得られたのである。⁹⁾しかしながら、リプシウスがより重要視したのは「マナー」や「振舞い」の修得であった。彼によれば、旅行を通じて「われわれのマナーを洗練し、気品を備え、あらゆる種類や立場の人々に対して振舞うこと」は、「知恵」や「知識」を支える「柱」であった。¹⁰⁾そのうえで彼は、「偉大な civility」で名高いイタリアとフランスこそが、こうした「上品で立派な身のこなし、賢明で優れた気持ちの伝え方、他者に対する洗練された謙虚な振舞い」を学ぶ場として相応しいと主張したのである。¹¹⁾

同時代の宮廷人トマス・ホビーは、以上のような「旅」を実践した典型的な人物であった。人文主義者ジョン・チークに学び、のちに在フランス大使となるホビーは、その生涯で四度の大陸旅行を行った(1547-8-50-12 シュトラスブルク、イタリア / 51-52 シャトーブリアン / 52-3 パリ、ブリュッセル / 54-5 イタリア)。彼はその行程で神学や人文学、へ

ブライ語、ギリシャ語、イタリア語を学び、リウイウスの記念碑を訪れ、各地の貴族と交際し、時には使節の随員として海を渡つた。⁽¹²⁾ その一つの成果として、ホビーはバリ滞在中にカステイリオネの『宮廷人』の翻訳に着手する。ホビーによれば、この『宮廷人』は「宮廷の振舞いを身につけて交際し、実行し、生活の訓練を行うために必要不可欠な道具の宝庫」であつた。ところが、彼の観察によれば、イングランドは他国と比べて文化的に「随分と劣」つていた。それゆえに彼は、一五六一年、すでに各国語に訳され、「あらゆるキリスト教国の宮廷を長いことろつき回つて」いた『宮廷人』の英訳版を出版したのである。⁽¹³⁾

このホビーをはじめとして、ルネサンス期には、のちに大使や使節、顧問官や議員となる多くのジェントルマンが大陸に渡つた。たとえば、エドワード六世期に枢密院書記となるウィリアム・トマスが『イタリア史』(1556)に記したように、「多くの外国人」、とくに「貴族の子弟や最良のジェントルマン」がイタリアに留学した。⁽¹⁴⁾ トマスによれば、以下のように、当時のイタリアは「他のあらゆる国民のなかで、civility がもっとも繁栄している」と考えられたのである。⁽¹⁵⁾

一般に(わずかな都市を除いて)、彼らはマナーや接し方においても、その弁舌に負けず劣らず心地よい。彼らは誇り高く、礼儀正しく、思慮があり、そのうえ威厳を備えているため、各人が君主の如く育てられたのではないかと思えるほどである。上位の者には恭順で、対等な者には謙虚であり、下位の者には優しく礼儀正しい。外国人には友好的で、礼を尽くして好意を得ようとする。⁽¹⁶⁾

ところが、一六世紀後半のエリザベス期以降になると、それまでのイタリア賛美に陰りが見え始める。⁽¹⁷⁾ たとえば、エリザベスの家庭教師であつた人文主義者ロジャー・アスカムは、『教師論』(1570)のなかで、イタリア旅行が逆に貴紳の子弟を墮落させ、「イタリア化したイングランド人(Englese Italianato)」を生み出すことを痛烈に批判した。⁽¹⁸⁾ もっとも、彼はカステイリオネの『宮廷人』には高い評価を与え、「学問に華麗な動作を加える」ために、それを「熟読し、丹念に内容を追ふこと」を勧めている。にもかかわらず彼は、「イタリアで費やされる海外旅行の三年間」よりも『宮廷人』を「イングランドの家の中で一年間」読むほうが望ましいと主張したのである。⁽¹⁹⁾ このようなアスカムの懸念は、単にイ

タリアの文化的衰退に由来するものではなかった。以下でも明らかにするように、それは大陸の「カトリック」に対する警戒感とともに、強い「イングランド」意識に根付いていた点で、以降も続く大陸旅行批判の原点をなしていたのである。⁽²⁰⁾

第二節 一七世紀の大陸旅行論

とはいえ、一七世紀に入っても、とくに内乱の時期においても大陸旅行の習慣は衰えることはなかった。⁽²¹⁾ たとえば、ジェームズ一世期の顧問官フランシス・ペイコンは「旅行について」(1625)のなかで、その教育効果を向上させるために、以下の事柄を精力的に観察する必要があると主張した。

見物したり観察したりしなければならぬものは、王侯の宮廷、とくに王侯が大使を謁見する時の宮廷、開廷して訴訟が聴取される時の法廷。同じく教会の宗教法廷、教会や修道院、そのなかに残る記念碑、都市の城壁や要塞。さらに舟つき場や港、旧跡や廃墟、図書館、大学、開催中の討論会や講義、船舶や艦船、大都市近郊の宏大な邸宅と快適な庭園、兵器庫、兵器工場、火薬庫、両替所、取引所、馬術の練習、フェンシング。兵士の訓練。その他。優れた人々が観に行くような喜劇。宝石や衣装の陳列所。貴重品や珍品、要するに訪れる土地にあつて記憶すべきあらゆるものである。⁽²²⁾

この一七世紀には、かつてのイタリアに代わり、ルイ一四世とヴェルサイユ宮殿のフランスが文明の中心となった。⁽²³⁾ こうしたなか、たとえばホップズやロックは貴族の子弟の家庭教師や亡命者として大陸に渡る。なかでも、大陸旅行の案内人を何度となく務め、他方で亡命者を支援していたのが、カトリックの聖職者リチャード・ラッセルズであった。⁽²⁴⁾ 一六七〇年にパリで印刷された彼の『イタリア旅行』は、「グランド・ツアー」という言葉をはじめて用いた点で、また、以降の大陸旅行の標準的な手引き書となった点で注目される。

ラッセルズの見解によれば、大陸旅行の行程は、これまでのようにフランス経由でイタリアに行き、ドイツやオラン

ダを通つて帰国するのではなく、逆にフランスを最終目的地とすべきであつた。イタリアでは一五、六歳の頃に二、三年間滞在して外国語を勉強し、音楽や絵画、建築や数学を学ぶとともに、数々の宮廷を訪問して、そこでの規則や実際の仕方を身につける。その後三年間はフランスでフェンシング、ダンス、乗馬等の訓練を行い、地理や歴史、政治を学んで帰国するのが理想とされた。⁽²⁵⁾

このような経験と教育はさまざまな成果をもたらす。世界は「偉大な書物」であり、「困難」に満ち、そこでは「他国の人々と自由に交際するため」の「多くの言語」の修得が不可欠となる。⁽²⁶⁾ ラッセルズによれば、大陸旅行の経験者に比べると、同じレベルでは「誰もリウイスやカエサル、グイッチャルディーニ、モンリユックを理解することはできない」。⁽²⁷⁾ 加えて、大陸旅行から戻ると、外の世界を知らないカントリ・ジェントルマンとは異なり、下位の者に対しても「はるかに謙虚で洗練された態度」を取るようになり、「自分の偉大さに驕り高ぶる」ことも極端に減る。⁽²⁸⁾ とくにラッセルズは、カステイリオネやグアッツォ、デッラ・カーサの名前を具体的に挙げながら、次のようにイタリアのマナーを絶賛した。本稿の観点から注目すべきは、ラッセルズによつて、それが「ヨーロッパ」における *civility* の原型であつたことが指摘された点であろう。

彼らのマナーに関して言えば、それはもつとも称賛されるべきものである。彼らはそれを書物を通じて教え、行為をもつて実践し、ヨーロッパ全体へと広めたのである。ヨーロッパはその *civility* を、宗教と同じく、イタリア人に負っているのである。彼らは外国人がどんな習慣を見せようとも、決して面と向かつて辱めることはない。たとえ、その習慣の奇異さがイタリア人の目に留まろうとも、彼は決してそれを笑うために口を開かないだろう。⁽²⁹⁾

大陸はヨーロッパ標準の *civility* を修得するための学校であつた。内乱期にフランスに亡命し、王政復古後に大法官となつたクラレンドン伯もまた、「教育についての対話」のなかで同様に、大陸旅行の利点を強調した。彼は登場人物の「宮廷人」や「兵士」の口を借りながら、「あらゆる宮廷」を巡る大陸旅行の「偉大な優れた目的」として、「資質や知識を

改善」し、「マナーや欠点を修正する」ことを挙げた。⁽³⁰⁾ そのうえで彼は、大陸旅行が「国民特有の悪徳 (national vice)」を除去する効果があることを次のように主張した。

滅多に自覚されない国民特有の悪徳があり、同じ環境のなかでは決して除去されません。その不都合や見た目の悪さは、他の国民の生活実践や慣習を通じて、たちどころに発見され、進んで回避されます。わたしは、以前よりも身近に行われるようになった、この時代における海外旅行の習慣が、われわれの振舞いや態度に現れていた頑固さをとても和らげ、荒々しさを取り除いたことを貴方にお伝えしなければなりません。われわれは、以前そうであった時代よりも、外国人に対して、またお互いに対しても、態度が洗練され、礼儀正しくなっているのです。われわれはヨーロッパの他のどの王国に比べても外国人に訪問されることが少なく、他方で外国人と過ごすことがどうしても必要なために、われわれが彼らを訪問することが不可欠になるのです。⁽³¹⁾

以上のように、ルネサンス期から一七世紀のイングランドにおいて、大陸旅行は理想的な政治教育であると考えられていた。その目的は、異国を精力的に観察し、人文主義的な教養を深めることにとどまらなかった。貴紳の子弟には、イタリアやフランスの宮廷や都市を舞台に、「見知らぬ他者」と交際する経験をを通じて、みずからの狭い生活世界を超えた「ヨーロッパ」の文明の作法を身体化することが求められたのである。

第二章 「文明の作法」——ジョン・ロックとシャフツベリの場合——

第一節 ロックとシャフツベリの「交際」

大陸旅行を通じた文明の作法の受容は以降も続いた。一八世紀は「グランド・ツアーの時代」であり、各地の宮廷や都市、貴族のサロンなどに加え、たとえばジュネーヴ近郊に住むヴォルテルを訪ねることが流行した。⁽³²⁾ このような絶え間ない「巡礼」と「回遊」は、とくにジェントルマン階層において、国境を超えた「ヨーロッパ」意識を醸成する契機

にもなったと考えられる。⁽³³⁾ しかしながら、他方で、そうした貴紳の子弟が、実際には「かぶれ者 (top)」⁽³⁴⁾ になって帰国するという「病弊」も指摘されていた。アスカムの議論にも見られたように、「パリのムッシュ」⁽³⁵⁾ (ミルトン) に自国のエリート予備軍を送り込む「はなはだ馬鹿げた慣習」(アダム・スミス) に対する批判も絶えることはなかったのである。とはいえ、すでに示唆したように、大陸旅行の是非をめぐる論争は、たんに「かぶれ者」の実態だけに触発されたのではない。本章以下でも論じるように、そこには「文明の作法」の受容をめぐる思想的な緊張と対立が潜んでいた。のちに、この論争の象徴となったのがジョン・ロックとシャフツベリである。たとえば、ロックは『教育についての考察』のなかで、以下のような大陸旅行批判を展開した。

海外旅行は教育の仕事の仕上げであり、紳士の完成であると普通考えられています。正直に言つて、外国旅行は大きな利益がありますが、通例子供を外国へやるのに選ばれる時期は、あの利益を物にすることが一番困難な時期であると思われまふ。……もし旅行によつてときとして、彼の目が開かれ、彼を用心深く、慎重にし、表面を超えて物事を見る習慣をつけ、礼儀正しい、鄭重な態度で当たり障りのないように身を守つて、外国人やあらゆる種類の人たちと交際して、自由にしかも安全に身を保ち、彼らの好意的な評価を失わないというの
でなければ、彼が外国に行つてもほとんど無駄でしょう。(§§ 212, 215).⁽³⁶⁾

もつとも、ロックの批判はあくまでも子弟教育が対象であり、旅行の教育効果そのものを否定した訳ではない。また、次節で検討するように、以上の発言にもかかわらず、ロックの教育論もまた「文明の作法」の文脈に即して解釈することが可能である。これに対して、『諸相論』(1711)の著者でもある第三代シャフツベリ伯もまた、ロックとは異なる立場から「文明の作法」を支持した。⁽³⁷⁾ 本章ではまず、両者の議論を検討し、同時代における「文明の作法」論の浸透を確認してみたい。

よく知られているように、シャフツベリの幼年教育に関与し、それを監督したのはロックであった。シャフツベリは一六八七年から二年間の大陸旅行に出かけた際、オランダに亡命中のロックを訪ねてもいる。⁽³⁸⁾ ところが、このような交

際にもかかわらず、自由・独立・平等の個人を前提に社会契約を説いた（とされる）ロックに対して、シャフツベリは逆に、人間の社会性を前提に「文明の作法」の必要を主張した。シャフツベリの『コモン・センス』によれば、人間は「公共の福祉と共通の利益に関する感覚、共同体や社会に対する愛情、慈愛の本性、人間性、親切心」を生得的に有している。この「コモン・センス」はまた、「人間に共通の諸権利、同じ人類間の自然の平等に対する正しい感覚から生じる civility の感覚」でもあった。⁽³⁹⁾

シャフツベリはまた、以上のような人間本性観に即して、自由な交際とコミュニケーションの重要性を繰り返し主張した。彼によれば、「上品さ (Politeness) は、すべて自由に依存する⁽⁴⁰⁾」。したがって、「冗談の自由、丁寧な言葉であらゆる疑問を呈することの自由、論者を攻撃せずにどんな議論にも検討を加え、異議を唱えることの許容」が不可欠である。なぜなら、「われわれはある種の友好的な対立 (amicable collision) を通じて相互に切磋琢磨し、尖った角や粗い面を滑らかにする」からであり、これを抑制すれば人間の相互理解が損なわれ、「civility や行儀作法、そして思いやりまでも」が「破壊」される⁽⁴²⁾。それゆえ、彼が利己主義的な人間観に立脚したホッブズの哲学を「虐殺の精神」に満ちた「冷酷な哲学」として厳しく批判したことは不思議ではない。さらに、こうした批判は当然のことながら、彼の師であるロックにも向けられた⁽⁴³⁾。

しかし、にもかかわらず、両者の関係が「友好的な対立」を保っていたことは、一六八七年から一七〇四年まで続いた書簡の交換によっても明らかであろう。シャフツベリによれば、時はまさに「洗練された、上品な、香り高い時代」を迎えていた。「ここで定められたものの、それに反するものは何であれ、粗野で、野蛮で、醜いものです。……良識、マナー、喜び、美德、あらゆるものの基準がここにありますが」(1694: 9.8)。このような文明化の過程を踏まえたうえで、彼は、たとえば一六九四年九月二九日付の書簡のなかで、自らの目指す学問が、観念の遊戯に陥っている「経験派」やデカルトやホッブズのような「体系派」とは異なることを強調した⁽⁴⁶⁾。すなわち、シャフツベリによれば、「本当の学問」とは、「自分自身」を知るとともに、「すべての人に対して、彼らが邪悪となり、われわれを傷つけようとも、社交的で良き人になること」にある⁽⁴⁷⁾。それゆえ、彼の学問の目的は「いかにして、すべてを自由にコミュニケーションさせるか」、「い

かにして、もつと社交的になり、より深い友人になるか」、あるいは「いかにして他者に奉仕するか」という点に絞られたのである。⁽⁴⁸⁾

第二節 ロックにおける「文明の作法」論

以上の書簡に対するロックの返信は残っていない。しかしながら、少なくとも彼の教育論に限定した場合、契約論に対するシャフツペリの批判にもかかわらず、ロックもまた、同時代における「文明の作法」論の伝統に属していたことが理解できる。

たとえば彼は、フランス旅行中に執筆した草稿「学問について」(1677)のなかで、シャフツペリと同様、学問と知識の目的が「実践」と「コミュニケーション」にあることを指摘した。⁽⁴⁹⁾さらに、一七〇三年の「ジェントルマンの読書と学問についての考察」では、知識改善の目的として、「自己の知識の増加」だけでなく、「他者に知識を伝達し、教示できるようになること」を挙げた。なぜなら、「故国への奉仕」を天職とするジェントルマンは、とくに、その言動によって「他者に影響を与えること」を任務とするからである。⁽⁵⁰⁾したがって、このジェントルマンが学ぶべき政治学の対象は、彼の『統治論』が扱った「社会の起源」や「政治権力の発生や範囲」に限定され⁽⁵¹⁾ない。すなわち、歴史書や法律書、地誌や年代記、そして旅行書等から導かれる「統治の技術」が新たに必要とされるのである。⁽⁵²⁾そのうえで彼は、「統治の技術」の構成要素として、ジェントルマンに相応しい「振舞い」を取り上げた。彼はここで、作法書の議論と同様に「人間に関する知識 (Knowledge of Man)」の重要性を指摘し、とくにアリストテレスの『修辞学』やラ・ブリュイエールの『カラクテール』を読むことを薦めたのである。⁽⁵³⁾

このように「他者」に対する「コミュニケーション」や「振舞い」を志向するロックの議論は、同時代の作法書や教育書の伝統に即してこそ理解し得る。⁽⁵⁴⁾ロックの蔵書には、ラ・ブリュイエールとともに、カステイリオネの『宮廷人』をはじめとする作法書も含まれていた。⁽⁵⁵⁾なかでも、以下で触れるウォーカーの『教育論』は、一六七三年の出版以来、一七世紀末までに六版を数えた代表的な教育書であった。このウォーカーの関心もまた実践的であり、「人間に関する知

識」に加え、とくにジェントルマンに必要な「活動的生活におけるルールと規則」の有用性が強調された⁽³⁶⁾。そして、「都市」や「宮廷」において、あるいは「外国人」とともに「活動的生活」を遂行するうえで、「第一に学習され、実践されなければならないもの」が civility であったのである⁽³⁷⁾。

ウォーカーによれば、この civility は以下の三点に存する。すなわち、(1)「行動や言動によって、他者に対するどんな侮辱や軽蔑、攻撃、あるいは軽視を表に出さないこと」。(2)「他者のためにあらゆる善き行いをなし、常に親切であるよう心掛けていること」。(3)「他者からどんな侮辱や攻撃を受けないこと」である⁽³⁸⁾。この civility は、他方で、型通りの「儀礼」や流行の「ファッション」、偽善的な「お世辞」とは異なる⁽³⁹⁾。それは、「他者の無垢な気質や、時には弱さに対して自分を寄り添わせ、すべての人に対して礼儀正しく、あらゆる人を裏表なく誉めること」であり、人を結び付ける「世界のもっとも強力な磁石」であった⁽⁴⁰⁾。

ロックもまた、『教育に関する考察』において、このような「文明の作法」の議論を踏襲した。彼によれば、civility とは、ウォーカーと同様、「交際において、誰に向かっても蔑視、あるいは軽蔑を示さないよう留意すること」にあった⁽⁴¹⁾。ロックはこの civility を内面と外面に分ける。すなわち、「他人の気持ちに傷つけまいとする気質」と、「外見や声、言葉、動作、身振り、そしてあらゆる外的な態度における品の良さや優雅さ」である。前者を有した人物は「礼儀正しい人 (Civil)」と呼ばれ、後者は「よく洗練された人 (Well-fashion'd)」と評される。内面の civility について言えば、それはまた、「あらゆる人びとに対する善意と尊敬の念」であり、それによって「人びとに対する軽蔑、非礼あるいは無視を態度で示さないようにし」、「その国の流行の風習と方法に従って、その人たちの身分、地位に応じて、尊敬と敬意を表すように気をつけること」を意味した。外面の civility は「心の内的な civility を表す言語」であり、「われわれの交際相手をつくろがせ、充分に喜ばせる」⁽⁴²⁾。このような civility を身につけた「礼儀正しい人」は、「役に立つ人よりも歓迎される」⁽⁴³⁾。したがって、civility は「まず第一に、子供たち、青年たちの習慣となるよう大いに注意すべきもの」であった⁽⁴⁴⁾。

第三章 「文明の作法」の危機

第一節 外面と内面の乖離

以上のように、「友好的な」対立関係にあったロックとシャフツベリは、ともにルネサンス以来の「文明の作法」の伝統に属していた。このことは、ともすれば「近代」や「デモクラシー」の観点から顕彰されがちなロックの歴史性を示す一つの事例であるのみならず、同時にまた、ルネサンス期以降における「文明の作法」の浸透を物語っている。このような「コモン・センス」を前提に、たとえばウォーカーは、「自信に満ちた美しい振舞いを生み出し、交際や議論を完全なものとする」ため、大陸旅行が不可欠であることを主張したのである。⁽⁶⁴⁾

ところが、にもかかわらずロックが大陸旅行批判に転じたことは、とくに一八世紀以降、「文明の作法」が大きな危機に直面したことを暗示するものでもあった。別稿でも指摘したように、この一八世紀には、商業社会化の進展に伴い、宮廷からロンドンへの文明の発信源の移動が見られた。⁽⁶⁵⁾ たとえば『スペクテイター』の執筆者アディソンによれば、行儀作法に「大きな革命的転換」が生じた。すなわち、ロンドンの「当世風の世界」では、儀礼的な作法ではなく、より「自由」で「気軽な」作法が好まれるようになったのである (no. 119)。⁽⁶⁶⁾ たしかに、クレインらが指摘するように、ロンドンのコーヒールハウスやクラブを舞台として、「上品さ (politeness)」がこの時代の新たなキーワードになった。⁽⁶⁷⁾ しかしながら、この時代に「文明の作法」が直面したものは、このような作法の様式に関わる「革命的な転換」にとどまるものではなかった。「文明の作法」の危機はまず、個人における内面と外面の乖離という形で表面化したのである。

ロックの議論にも見られたように、「文明の作法」は「他者」を志向し、「外見や声、言葉、動作、身振り」などの「外的な態度における品の良さや優雅さ」が重要視される。したがって、作法の遂行には自覚的な役割演技が要求されるが、それは他方で、内的な自己に極度の緊張を強いるものでもあった。たとえばシャフツベリは他者からの「評価」に極度なまでに敏感であった。ロック宛の書簡のなかにも記されていたように、他者から「いかに思われており、いかに思われるであろうか」というのが彼の主要な関心事であった (1694. 9. 8)。⁽⁶⁸⁾ ところが、その代償として、シャフツベリは「自

己」の存在に疑問を抱くことになる。「わたしが保たねばならない人格とは何なのか。いかにしたら、わたしはわたしの人格のままに動けるのか。わ・た・しは誰なのか?」。彼はノートの上に「自己(Self)」と題する項目を設け、この問いを繰り返して発したのである。⁽⁶⁹⁾

このような、「洗練された、上品な、香り高い時代」における人格喪失の危機に対して、これもロックの議論に現れていた「内的な自己」の契機が、「公的なペルソナ」と分離される形で強調されるようになる。すなわち、外面的な「作法」や「上品さ」と対比される、内面的な「感性(sensibility)」や「情感(sentiment)」、「誠実さ(sincerity)」の主張である。⁽⁷⁰⁾のちにロマン主義へと至る、このような思想的傾向を端的に表明したのがJ・J・ルソーであろう。

ルソーの「文明社会」に対する反感はよく知られている。それはまた、当然のことながら、「文明」の本質をなす「作法」や「社交」に対する嫌悪を伴っていた。

自分一人であるときでさえ精神を統御しえないわたしが、他人と談話するときにとんなかは、想像にまかせよう。談話でうまく話をするためには、一時にしかも即座に千のことを考えなければならぬ。そのうち少なくとも一つは忘れるに違いない数々の礼儀上の約束を思っただけでも、けっこう弱気になってしまう。ひとは社交の集まりなどでどうしてしゃべったりできるのか、わたしには想像もできない。……こういう辛抱のできぬ拘束だけでも社交はいやになる(「告白」)。⁽⁷¹⁾

一そう精緻な研究と一そう繊細な趣味とが、ひとをよるこぼす術を道徳律にしまった今日では、つまらなくて偽りの画一さが、われわれの習俗で支配的となり、あらゆるひとの精神が、同一の鑄型の中に投げこまれてしまったように思われます。たえずお上品さが強要され、礼儀作法が守られます。つねにひとびとは自己本来の才能ではなく、慣習にしたがっています。ひとびとはもはや、あえてありのままの姿をあらわそうとはしません(「学問芸術論」)。⁽⁷²⁾

第二節 イングランド意識の昂揚

以上のような「ありのまま」の内面への回帰とともに、「文明の作法」を脅かし、大陸旅行批判を強める契機となったのが、ルネサンス期から続くイングランド意識の昂揚であった。⁽⁷³⁾たとえば、すでに紹介したクラレンドンの「教育についての対話」のなかで、「宮廷人」とは異なり、大陸旅行に批判的な立場を鮮明にしたのが「法律家」と「カントリ・ジェントルマン」であった。つまり、彼らはイングランドに固有の「コモン・ロー」や伝統的な「カントリ」の価値を強調したうえで、当時の法曹養成機関であった法学院、もしくはオックスブリッジによる政治エリートの「自国での養成(Inland Breeding)」を主張したのである。⁽⁷⁴⁾

これに対して、「文明の作法」を支持する論者は、「イングランド」に限定されることのない「普遍性」を強調した。⁽⁷⁵⁾たとえば、ウォーカーによれば、「civilityの規則」は「永遠に普遍」であり、「時代や季節」によって変化する「宮廷の流行」とは異なる。⁽⁷⁶⁾また、ゴールドスマスは『世界の市民』(1760-2)のなかで、アムステルダムの商人に宛てた架空の書簡を通じて、差出人である中国人に「儀礼はすべての国で異なるが、真の上品さはどこでも同じである」と語らせた。彼によれば、「見識のある旅行者」は、「賢者は世界中どこでも品が良いが、愚者は自国においてのみ上品であること」を「たちどころに見抜く」のである。⁽⁷⁷⁾もともと、他方で、ロックの議論にも見られたように、具体的な作法は「その国の流行の風習と方法」などに応じて変化することも認識されていた。しかしながら、たとえばチェスターフィールドによれば、行儀作法は、「たしかに人や場所、情況によって変化する」⁽⁷⁸⁾が、それは「モード」の相違であって、「その本質はどこでも、永遠に変わらず同じなのである」⁽⁷⁸⁾。

ところが、以上のような「世界の市民」による「文明の作法」論は、大陸旅行を批判する側から見れば、あくまでも「フランス」寄りの「女性的な」議論であった。⁽⁷⁹⁾ジェラルド・ニューマンによれば、このような反フランス感情は、ジョージ二世治世下の1750年代に至って本格的に噴出することになる。⁽⁸⁰⁾その実例は次章で検討するが、以下ではまず、大陸旅行批判の昂進が、「イングランドの自由」を主張するコモン・ローヤーやカントリ・ジェントルマンの議論に加え、いわゆる「共和主義」の伝統を受け継いだ「コモンウェルスマン」の議論にも窺えることを指摘しておきたい。

ここで取り上げるのは、ロックの同時代人ロバート・モルズワースの『デンマーク論』(1697)である。モルズワースは当時、「コモンウェルスマン」と呼ばれた改革派サークルの中心人物であった。⁽⁸¹⁾彼の『デンマーク論』は、「自由」が失われたデンマークの悲惨な現状を叙述した書物である。彼によれば、デンマークはプロテスタント国家になったがゆえに、逆説的に、「隷属がフランスよりも絶対的な形で確立された」⁽⁸²⁾。しかしながら、本稿が着目するのは、ウィット政治思想の展開に大きな影響を与えた本文の内容ではなく、その前提となる彼の教育論が展開された序文の議論である。彼はそこで、大陸旅行の現状を以下のように強く批判した。すなわち、彼によれば、貴族の子弟は大陸の「恣意的な宮廷」に幻惑され、その結果、「国内の粗野な自由」よりも「金箔の奴隷」を好むようになる。さらに、このような「かぶれ者」たちは、「新しい外国のモード」に従わない「古い型のカントリマン」と対立するに至る。⁽⁸³⁾

もつとも、このような批判にもかかわらず、モルズワースはロックと同様、旅行の教育効果そのものを否定した訳ではない。モルズワースにとって、旅行で得られる経験や観察はむしろ「暴君という疫病に対する偉大な解毒剤」であった。⁽⁸⁴⁾それゆえ、一定の見識さえ備えていれば、「すべてのジェントリは海外に出るべき」である。⁽⁸⁵⁾しかしながら、彼が主張する旅行の性質は、文明の摂取を目的とした既存の大陸旅行とは似て非なるものであった。たしかに彼は、イングランドが「世界から切り離されて」おり、そこでの教育が「あまりにも自国に縛られすぎたこと」を認めている。⁽⁸⁶⁾ところが、その目的地は、南の大陸ではなく、「北方の君主国」であった。彼によれば、フランスやスペイン、イタリアといった「洗練された香り高い国々」は旅行者の「目をくらませる」。これに対して、北方では「奴隷状態を何の装飾もなしに、ありのままの色彩で観察する」ことができる。⁽⁸⁷⁾彼にとって、大陸はもはや文明の学校ではなかった。彼によれば、名譽革命後のイングランドの国制は「あまりに完全で、改善の余地がない」ほど優れていた。⁽⁸⁸⁾それゆえ、旅行の目的は逆に、ジェントルマンに「世界の奴隷化された地域の悲惨さ」を目の当たりにさせ、「故国の幸福を愛するように仕向ける」ことであったのである。⁽⁸⁹⁾

第四章 リチャード・ハードの大陸旅行論

第一節 ハードの対話編

以上のような、「内面」への退行と「イングランド」意識の昂揚によって、「普遍的」な「文明の作法」は危機に瀕した。それと同時に、政治教育としての古典的な大陸旅行の役割も失われていった。一八世紀における、このような思想の変化の分水嶺をなすのが、以下で紹介するリチャード・ハードの『外国旅行についての対話』(1764)である。

ハードはヨーマンの家庭の出身であったが、ケンブリッジを経て、のちにジョージ三世の王室付牧師や皇太子の教育係、ウスターの主教等を務めた人物である。その一方で、彼はアディソンの著作集を編集するなど、いわば「知の世界」の編纂作業に携わった。このハードが当時の知的傾向を示す典型的な人物であったことは、一七五九年に出版された彼の『道徳・政治対話編』に余すことなく示されている。この作品に収録された対話はそれぞれ、「対話のマナー」「社交における誠実さ」「隠退」「エリザベスの時代」「イングランドの国制」を主題とする。それらはいずれも、以上で指摘した問題群(作法、内面、イングランド)を扱うものであった。さらに、彼が六二年に上梓した『騎士道とロマンスに関する書簡』は、ロマン主義の先駆をなす作品でもあった。それゆえ、以下でも論じるように、ハードの作品は、一八世紀の「文明の作法」をめぐる論争の「ステレオタイプ」を示したものと考えられるのである。

ハードが採用した対話形式は、それ自身が「文明の作法」の具体化であった。彼は「近代人」による「論考」(dissertation)という「直接的な方法」ではなく、プラトンやキケロと同様に、「対話」という「古代人」の「愉快な形式」を採用した(Liv-v)。ハードによれば、対話には「上品さ」が求められ、「懐疑的で、結論を出さない雰囲気」が必要とされる(x)。
また、対話においては、「真理」は「正式な形で伝えられる」のではなく、「仄めかされる」。このような対話の効果は、「論点の両方の側面を論じながら、読者を知らず知らずに、真理のある側に引き込む」(xii) ことであった。

さらに彼は、対話の登場人物として「実在の、良く知られた、尊敬される」(ix-xiv) 人物を据えることによって、議論に「リアリティ」を持たせる必要を強調する。ここで重要なのは「もつともらじき(probability)」である。彼によ

れば、人間は「真理に対する愛」とともに、「騙されることを求める傾向」を併せ持っている。たしかに、対話の内容は実際とは異なるが、読者はそれを「承知」している。したがって、逆に、作者が議論に何の「技巧や工夫」も凝らさなかつた場合、それは「われわれの理性に対する、あまりにも大きな侮辱」になるとさえ主張されたのである (I: xvii)。

このような対話作品を通じて、ハードは「文明の作法」と「誠実さ」、そして「フランス」と「イングランド」を対比させていく。たとえば、「社交における誠実さ」では、「われわれ自身を時間を状況に適應させること」の是非が議論された (I: ii)。対話者の一人によれば、「適応」は「小さなコモン・センス」であり、「必要」や「時」に応じて態度を変えることは「黄金の美德」であつた (I: 46)。これとは逆に、「誠実さ」は「柔軟さに欠け」、「あらゆる交際や振舞いにおいて誠実であること」や「真理に真面目に従うこと」は、「実践においては不可能」とされた (I: 45)。ところが、たとえば別の対話では、このような、「あらゆる civility の洗練」を体現した「フランス」が強い批判の対象になつた。すなわち、「隠退について」の対話者によれば、そこでの「華やかな生活」は、「心の奥の感情」に従えば、「空虚で誤りであり、欺瞞的でさえ」あつた。「外側はたしかに品が良い」が「それ以上に醜く、憎むべきものはない」。「すべては野心、策略、そして偽り」である。重要なのは「真理」と「誠実さ」であり、それがなければ「会話は単なる言葉にすぎず、磨かれたマナーはもつとも愚劣な気取り」に転化するのである (79-80)。

第二節 「ロック」と「シャフツベリ」の対話

ハードの『外国旅行についての対話』は、以上のような思想的な緊張と対立がもつとも鮮明に現れた作品である。そして、モールズワースを名宛人に設定したこの対話のなかで、ハードが「実在の、良く知られた、尊敬される」人物として登場させたのが「ロック」と「シャフツベリ」であつた (以下、登場人物のロックとシャフツベリを指す場合、人名に「」をつける)。

この対話のなかで、「シャフツベリ」は大陸旅行を強く支持する。彼によれば、大陸旅行は「教育においてもつとも重要で本質的な部分」であつた (3:32)。彼はとくに、「社交や一般の交際」によって得られる「世界の知識 (knowledge of

the world」の必要を強調する。それは、あらゆる学問を統括する「マスター・サイエンス」であり、「精神を揚げ、同時にまた、頑固で悪質なあらゆる偏見を矯正する」(28-47)。これに対して、「壁を巡らし、狭い地域に閉じ籠った」「孤独な隠退生活」は「野蛮(Savage)」そのものであった。さらに彼は、「土着の野蛮(native barbarism)」を強く批判する。彼によれば、「人間の集団」は、「もし仮に一つの領域に閉じ込められ、同一の政治的枠組みの影響下で一緒に密着していれば、「容易に一体化」し、「同一の感情や意見に走り」、やがて「画一的な性格を示すようになる」。したがって、これらの「地域的な偏見」は、「より社会的な習慣」や「ずっと幅広く、より徹底したコミュニケーションの経験」によって「緩和される」必要があった(1:28-30)。

こうして「シャフツベリ」は、「ヨーロッパ」の文明を基準にして「イングランド」を具体的な批判の対象に据えた。すなわち、イングランドは「そこに住む人々の civility で名が知れることは決してなかった」のであり、むしろ「未だに他のヨーロッパから、尊大で、田舎者で、非社会的と思われる」のである(333)。

以上の議論は、実際のシャフツベリの主張とも符合する。彼の『諸相論』によれば、「われわれはヨーロッパの人々なかで最後の最後まで野蛮であり、もつとも最近になって文明化され、洗練された」存在にすぎなかった。また、ローマ人やノルマン人による過去の征服によって「技芸や洗練された嗜み」が「海外から」もたらされたことも「認めなくてはならない」。それらの文芸は、大陸の「宮廷や国家、アカデミー、そして機知やマナーを生み出した異国の場所」から「遠路はるばる」やって来た「お下がりのお下がり」であった。これに対して、イングランドの教育方針は、「できる限り外を見ず、われわれの視野を狭い範囲にとどめ、自国のものでないすべての知識や学問、マナーを軽蔑すること」にあった。それゆえ、「われわれは、われわれが故郷(home)と呼ぶ地域から遠く離れるよう骨を折らなければならない」。彼によれば、「偉大な人物は常に旅人であった」のであり、「世界との交際」によってこそ「本当の優れたジェントルマン」が育つのである⁽³²⁾。

ところが、登場人物の「ロック」は逆に、大陸旅行を徹底的に批判する。彼によれば、教育の目的は「知性を形成し、内面を規律すること」にあった(3:67)。これに対して、大陸旅行は「時間の浪費」であり、「精神の散漫」をもたらず。

旅行で得られるものは、上辺だけの礼儀作法や自国では使わない外国語など、「なくてもよい」ものばかりである。それどころか、大陸帰りの若者は「女性化」し、「かぶれ者」に墮落してしまう(74, 81, 96)。さらに、「このように獲得した civility の高き代償」として「無宗教」と「無神論」を招く危険も大きい(17)。したがって、大陸旅行は「不十分」かつ「不適切」であり、要するに「最悪」の教育であったのである(96, 81)。

「ロック」はさらに、以上のような大陸旅行批判の型を踏襲したうえで、「イングランド」に固有の価値を強調した。彼が理想とするのは、「世界の市民」ではなく、あくまでも「イングランドの市民」であった。この「イングランドの市民」は、「故国に対する義務」を担い、「徳と宗教の原則」を守り、「公共善」を目的に掲げ、「国制に対する崇敬の念」を抱く(369-70)。そのうえで「ロック」は、「ヨーロッパ」の宮廷を発信源とする「文明の作法」が「絶対的」な君主国の所産であることを指摘し、それが「イングランド」の「自由」とは相容れないことを以下のように主張した。

それぞれの国家のマナーはそれぞれに特有であり、それぞれに最も良く適合します。大陸で広まっている civility は、われわれの civility に比べてよく研究され、優美であるかもしれませんが。しかし、だからといって優先されるべきものではありません。大陸の洗練は、それに対応する政体から生まれたものです。……ヨーロッパのより絶対的な君主国においては、あらゆる人は宮廷人です。われわれの、より自由な君主国では、あらゆる人は市民であるべきです。立居振舞いや仄めかしの技術はフランスで流行らせましょう。……しかし、ここではもっと男性的な氣質を広めましょう。われわれは、追従するのではなく、奉仕すべき君主を戴いているのです。われわれは、飾り立てる宮廷ではなく、抱擁すべき故国(country)を有しているのです(149)。

したがって、「ロック」は、宮廷的な「上品さ」の価値を斥け、「自由」なイングランド市民が「朴訥」で「粗野」であることを肯定する(315)。彼によれば、「まさしく偉大な人物は誰も、世界がそう呼ぶように、完全に上品であったことはない」。また、「一般人」であっても「マナーや優雅さに過剰にこだわることは「有害」であり、「この自由な国家で義務を果たすために実務家(man of business)が必要とする精神力や活気を砕いてしまう」(104-5)。彼にとって

重要なのは、ヨーロッパの「文明の作法」よりも、「男性的」な「公共精神」であり、「素朴で高潔な人格 (unpolished integrity)」であったのである (150)⁽⁹³⁾。

むすびにかえて

シエルドン・ウォリンによれば、「理論」を意味するギリシャ語 *theoria* は、「異国を見物すること、あるいは「さまざまに異なった制度や価値観を観察するために、長旅に出ること」を意味していた。⁽⁹⁴⁾ 初期近代イングランドの大陸旅行は、このような「地平の拡大」を促進するのみならず、同時代における政治エリート教育の仕上げとして、大陸における「文明の作法」を身体化することを目的とした。「文明の作法」は、たんに作法書を受容するだけでなく、「文明」の発信源である「ヨーロッパ」の宮廷を実際に回遊することを通じて培われる「実践知」、あるいは「コモン・センス」であった。

ところが、大陸旅行はその実態だけではなく、思想的な側面からも次第に強い批判を浴びるようになった。カトリックに対する伝統的な反感に加え、とくに一八世紀のロマン主義に至る流れのなかで、「文明の作法」の妥当性そのものが強く問い直されるようになった。ルソーに代表される「誠実さ」や「感性」といった「ありのままの」自分の主張や、モールズワースにも見られた「イングランド」意識の昂揚はその代表的な例である。

ハードの対話編、とくに『外国旅行についての対話』は、以上のような論争の型を典型的に示した作品であった。もともと、その登場人物であった「ロック」と「シャフツベリ」は、実際のロックの教育論（および彼の知的営為の総体）やシャフツベリの内的葛藤までも正確に再現したものではない。しかし、それゆえに逆に、同時代の「ステレオタイプ」を端的に示した作品であるとも言えよう。それはまた、「ロック」が「イングランド」の偶像として、いわば「神話化」される過程をも物語っているのである。

他方で、この時代の旅行に関して言えば、古典的な大陸旅行に対する批判にもかかわらず、旅行者自体の数は増加傾

向にあった。しかしながら、その性格は、一八世紀後半以降、とくに産業革命とフランス革命を経た後に一変する。「異質な他者」と交際するための旅行は、中産階層を中心とした消費と娯楽の対象に転化した。⁽⁹⁵⁾ 同時にまた、交通機関も馬車から汽車へと様変わりし、情報の伝達手段も、かつての上品な交際や会話、紹介状ではなく、新聞や雑誌、ガイドブックなどの活字媒体が主流となる。⁽⁹⁶⁾

このような、「近代」における civility から civilization への移行の過程で、「イングランド」(もしくは「ブリテン」)という「想像の共同体」が形作られる。「ロック」の議論にも見られたように、とくに名誉革命以降、「イングランド」の「自由」や「公共精神」の伝統が強調されるとともに、ジェントルマンの子弟による「ヨーロッパ」への「巡礼」の道が閉ざされていく。この新たな時代の「イングランド」は、たとえばカントによれば、「すべて知り合った初めには冷淡で、見知らぬ人には無関心」であった。⁽⁹⁸⁾ こうして、ルネサンス期から続いた「他者」との交際を可能にする「文明の作法」の衰退とともに、新たに「デモクラシー」と「ナショナリズム」の時代が到来するのである。⁽⁹⁹⁾

註

(1) もっとも、決闘の例に見られるように、作法は必ずしも暴力を否定するものではない。 Cf. Markku Peltonen, *The Duel in Early Modern England: Civility, Politeness and Honour* (Cambridge, 2003). しかしながら、作法は実定法と異なり、そのサンクションはもっぱら評価や評判であり、公的な物理的強制力の発動を一般に要請しない。

(2) Cf. 熊倉功夫『文化としてのマナー』岩波書店、一九九九年。頁三二、二五四頁。

(3) ノルベルト・エリヤス『文明化の過程(上・下)』中村元保、吉田正勝、波田節夫他訳、法政大学出版局、一九七七年。同『宮廷社会』波田節夫、中楚芳之、吉田正勝訳、法政大学出版局、一九八一年。

(4) 『Civility に関する歴史研究』Anna Bryson, *From Courtesy to Civility: Changing Codes of Conduct in Early Modern England* (Oxford, 1998); 'The Rhetoric of Status: Gesture, Demeanour and the Image of the Gentleman in Sixteenth and Seventeenth-Century England', in Lucy Gent and Nigel Llewellyn eds., *Renaissance Bodies: The Human Figure in English Culture c. 1540-1660* (London, 1990), pp. 136-53; Peter Burke, Brian Harrison, and Paul Slack eds., *Civil Histories: Essays presented to Sir Keith Thomas* (Cambridge, 2000).

- (5) 木村俊道「宮廷から文明社会へ―初期近代ブリテンにおける『文明』と『作法』」、『政治研究』(九州大学政治研究会)、第五〇号(二〇〇三年)、一五―四三頁。
- (6) *OED*によれば、この大陸旅行(Grand Tour)は以下のように説明されている。「ヨーロッパの主要な都市や見所をめぐる旅。以前は、良家の生まれか、あるいは裕福な家の子弟の教育に不可欠と考えられていた」。本稿も、このような意味での、シェントルマン教育としての大陸旅行を対象とする。なお、シェントルマン層以外も含めては、一五四七年から一八四〇年までの旅行記をサンブルとした大陸旅行の統計的な分析として、John Towner, 'The Grand Tour: A Key Phase in the History of Tourism', *Annals of Tourism Research* 12 (1985), pp. 297-333.
- (7) 本城靖久「グラランド・ツアー―英国貴族の放蕩修学旅行」中公文庫 一九九四年。ただし、一九八三年の中公文庫版では、副題は「良き時代の良き旅」となっている。また、この書物自体はグラランド・ツアーについての格好の入門書である。
- (8) 一六世紀の大陸旅行について、Edward Chaney, *The Evolution of the Grand Tour* (London, 1998); Kenneth Charlton, *Education in Renaissance England* (London, 1965), pp. 215-26.
- (9) Justus Lipsius, *A Direction for Travellers*, [tr. Sir Edward Stradling] (London, 1592), B1^{r-v}, B4^r.
- (10) *Ibid.*, C1^{r-v}.
- (11) *Ibid.*, C1^v, B4^r. また、ヘロンによれば、旅行は「他者」を必要とする「人間の本性」に適したものであった。Haly Heron, *The Keyes of Consaile: A Neue Discourse of Morall Philosophie*, ed. V. B. Heltzel (London, 1579; Liverpool, 1954), p. 63.
- (12) Thomas Hoby, 'A Booke of the Travaile and Life of me Thomas Hoby', ed. Edgar Powell, in *The Camden Miscellany*, vol. 10 (London, 1902). ホューはここで、次註を挙げた文献の Raleigh による Introduction の他、Chaney, *The Evolution of the Grand Tour*, esp., pp. 62-6.
- (13) Baldassare Castiglione, *The Book of the Courtier*, tr. Sir Thomas Hoby, intro. Walter Raleigh (1900; NY, 1967), pp. 7, 8, 5.
- (14) William Thomas, *The History of Italy*, ed. G. B. Parks (1549; Ithaca, 1963), p. 10. ティムズはここで、Parks の Introduction の他、Chaney, *The Evolution of the Grand Tour*, pp. 70-6. ちなみに、ティムズは一五四八年二月、イタリヤから戻る途中、シェントラスブルクでホューに出会った。Hoby, 'A Booke of the Travaile', p. 4.
- (15) Thomas, *The History of Italy*, p. 3.
- (16) *Ibid.*, p. 12.

- (17) たとえば、ジェームズ一世の国王私室となるメリントンには、フィレンツェにおける「過去の自由」と「現在の軌」の対照を指摘した。Sir Robert Dallington, *Survey of the Great Dukes State of Tuscany* (London, 1605), p. 66. Cf. G. B. Parks, 'The Decline and Fall of the English Renaissance Administration of Italy', *Huntington Library Quarterly* 21 (1967-8), pp. 341-57.
- (18) Roger Ascham, *The Scholemaster* (London, 1570), fol. 26.
- (19) *Ibid.*, fol. 20. 同様に大陸旅行批判を展開した同時代の議論として、Richard Mulcaster, *The Educational Writings of Richard Mulcaster (1532-1611)*, ed. James Oliphant (Glasgow, 1903), pp. 73-7.
- (20) 実際、エリザベスの破門(一五七〇)等によりカトリックとの緊張が高まった一五六〇年代末以降から九〇年代初めまでの間、イタリアへの旅行は困難になった。Chaney, *The Evolution of the Grand Tour*, pp. 76-87. たとえば、当時、在フランス大使の随員であったネイコンは一五七八年、イタリア行の申し出を却てやむを得ず、Lisa Jardine and Alan Stewart, *Hostage to Fortune: The Troubled Life of Francis Bacon 1561-1626* (1998; London, 1999), p. 63.
- (21) 十七世紀の大陸旅行について、John Stoye, *English Travellers Abroad 1604-1667* (1952; Rev ed., New Haven, 1989); G. B. Parks, 'Travel as Education', in R. F. Jones et al., *The Seventeenth Century: Studies in the History of English Thought and Literature from Bacon to Pope* (1951; Stanford, 1965), pp. 264-90.
- (22) Francis Bacon, *The Essays or Counsels, Civil and Morall*, in *The Oxford Francis Bacon*, vol. 15, ed. Michael Kiernan (1985; Oxford, 2000), pp. 56-7 (渡辺義雄訳『ベーコン随想集』岩波文庫、一九八三年、八五―六頁)。翻訳は渡辺訳を用いたが、一部変更した。このネイコンと作法書の伝統については、拙著『顧問官の政治学―フランシス・ベーコンとルネサンス期イングランド』木鐸社、二〇〇三年。とくに第五章参照。なお、この時代に大陸旅行を支持した議論の例として、Henry Peacham, *The Compleat Gentleman* (London, 1622), ch. 16. また、同時代の旅行手引書として、Thomas Palmer, *An Essay of the Meanes how to make our Travels* (London, 1606). もともと、ペルローは「イタリアでは civility と腐敗が混在している」と注意を促している。 *Ibid.*, pp. 42-5.
- (23) Stoye, *English Travellers Abroad*, pp. 9, 38, 164-6.
- (24) Edward Chaney, *The Grand Tour and the Great Rebellion* (Geneve, 1985).
- (25) Richard Lassels, *The Voyage of Italy* (Paris, 1670), éiv^v - ii^r.
- (26) *Ibid.*, a iij^r - v^r.
- (27) *Ibid.*, a vi^r.

- (36) Shaftesbury, *Characteristics of Men, Manners, Opinions, Times*, ed., L. E. Klein (Cambridge, 1999), p. 48.
- (40) *Ibid.*, p. 31.
- (41) *Ibid.*, p. 33.
- (42) *Ibid.*, p. 31.
- (43) Klein, *Shaftesbury*, p. 65.
- (44) Voile, *The Third Earl of Shaftesbury*, pp. 60-70.
- (45) Locke, *The Correspondence of John Locke*, ed., E. S. de Beer, vol. 5 (Oxford, 1979), p. 124 (Letter 1783).
- (46) *Ibid.*, pp. 150-1 (Letter 1794). シャンソニエリは同じ書簡の冒頭で次のように述べている。「ロッキン殿。貴方は、知っているとおり、もし私が自分の字間からばべんな形であれば有益で、貴方にとって無用ではないと思える事柄を導き出した場合、急かされるまでもなく、必ずそれをお伝えする (Communicate) であらうことは、おそらく充分にお分りかと存じます」(p. 150)。
- (47) *Ibid.*, p. 153.
- (48) *Ibid.*, pp. 150, 152.
- (49) Locke, 'Of Study', in J. L. Axtell, *The Educational Writings of John Locke* (Cambridge, 1968), p. 406.
- (50) Locke, 'Mr Locke's Extempore Advice &c.', in Locke, *Some Thoughts Concerning Education*, eds, J. W. and J. S. Yolton, p. 319. なお、一般に Some Thoughts concerning Reading and Study for a Gentleman と呼ばれるこの草稿の重要性に着目した研究として、中神由美子『実践としての政治—ノートとしての政治—シモン・ロッキン政治思想の再構成』創文社、二〇〇三年。とくに第一部第三章。
- (51) Locke, 'Mr Locke's Extempore Advice &c.', p. 321.
- (52) *Ibid.*, pp. 322-7.
- (53) *Ibid.*, p. 325.
- (54) 一八世紀の教育論について、Brauer, *The Education of a Gentleman*. 安川哲夫『シェントルメンと近代教育—学校教育—の誕生—』勁草書房、一九九五年。ロッキンと同時代の教育論との関係については、Axtell, *The Educational Writings of John Locke*, pp. 49-68; J. W. and J. S. Yolton, 'Introduction', in idem eds, Locke, *Some Thoughts Concerning Education*, pp. 8-14; R. C. Stephens, 'John Locke and the Education of the Gentleman', *Researches and Studies* (The University of Leeds Institute of Education) 14 (1956), pp. 67-75. また、ロッキンにおける「社交の世界」の存在を指摘した論文として、朝倉拓郎「ロッキン倫理学の

- 基本構造と『政治の世界』、『政治研究』（九州大学政治研究会）、第五一号（二〇〇四年）、二七-五七頁。
- (15) Axtell, *The Educational Writings of John Locke*, pp. 66-8.
- (16) Obadiah Walker, *Of Education* (Oxford, 1673; Menston, 1970), The Preface.
- (17) *Ibid.*, pp. 210-1, 209.
- (18) *Ibid.*, p. 211.
- (19) *Ibid.*, p. 212.
- (20) *Ibid.*, pp. 225-6.
- (21) Locke, *Some Thoughts Concerning Education*, p. 203 (『鎖語』二二九頁)。
- (22) *Ibid.*, p. 200 (『鎖語』二二二-二四頁)。
- (23) *Ibid.*, p. 203 (『鎖語』二二八頁)。また、中神『実践と政治』第三部第三章「よびよび二二頁以下を参照。
- (24) Walker, *Of Education*, p. 192; Gailhard, *The Compleat Gentleman* (1678), vol 2, pp. 6-7.
- (25) 木村「個性と文壇社会」° John Brewer, *The Pleasures of the Imagination: English Culture in the Eighteenth Century* (London, 1997), ch. 1.
- (26) Joseph Addison, Richard Steele, and others, *The Spectator*, vol. 1, eds., C. G. Smith (London, Everyman's Library, 1907; 1967), pp. 361-2.
- (27) 小川 健一 Klein, 'Politeness and the Interpretation of the British Eighteenth Century', *The Historical Journal* 45 (2002), pp. 869-98. 和訳『良紳と良女』の politeness 母語の読者の文化を論じた。G. J. Schochet ed., *Politics, Politeness, and Patriotism (The Folger Institute Center for the History of British Political Thought Proceedings, vol. 5, Washington, D. C., 1993)*. 42-43『Transactions of the Royal Historical Society, 6th series, 12 (2002)』に聖徳の語彙文を参照。
- (28) *The Correspondence of John Locke*, vol. 5, p. 124 (Letter 1783).
- (29) P.R.O. 30/24/27/10, p. 134; Benjamin Rand, *Third Earl of Shaftesbury: Life, Letters and Philosophical Regimen* (London, 1900), p. 189; Klein, *Shaftesbury*, pp. 70-80.
- (30) Philip Carter, *Men and the Emergence of Polite Society, Britain 1660-1800* (Harlow, 2001); Newman, *The Rise of English Nationalism*, ch. 6; Leon Guithamet, *The Sincere Ideal: Studies on Sincerity in Eighteenth-Century English Literature* (Montreal, 1974).

- (71) ルソー『告白』上、桑原武夫訳、岩波文庫、一九六五年（一六五頁）（第一部第三巻）。
- (72) ルソー『學問芸術論』、前川貞次郎訳、岩波文庫、一九六八年、一七頁。
- (73) Newman, *The Rise of English Nationalism*, chs. 4-8; Linda Colley, *Britons: Forging the Nation 1707-1837* (1992; London, 2003) (リンダ・コリー『イギリス国民の誕生』川北稔監訳、名古屋大学出版会、二〇〇〇年)。よほど支配層の「イギリス化」にこだわった。ch. 4. のこころ、コリーの対象は「ブリタン」ではなくて注意しなければならぬ。
- (74) Clarendon, 'A Dialogue...concerning Education', p. 336.
- (75) Brauer, *The Education of a Gentleman*, pp. 137-9.
- (76) Walker, *Of Education*, p. 212.
- (77) Oliver Goldsmith, *The Citizen of the World*, in *The Miscellaneous Works of Oliver Goldsmith*, intro., David Masson (London, 1878), p. 148 (Letter XXXIX).
- (78) Chesterfield, *The Letters of Philip Dormer Stanhope 4th Earl of Chesterfield*, vol. 4, ed. Bonamy Dobrée (1932), p. 1428 (Letter 1669; 1749.11.3). 同書が「ノットスに二十六年の講演が次のように述べた。「教育的であるべき上品な civility が、その国民が自らを教へて回つて来る。けれども、それらが纏わなければならないべきものは異なる。それは「Sir Joshua Reynolds, *Discourses on Art*, ed., R. R. Wark (1797; New Haven, 1997), p. 134 (Discourse VIII).
- (79) 『L'Esprit』『文壇の年表』などへの引用を断つて「シモンヌー」誰の著作か叫びたい。Michèle Cohen, 'The Grand Tour: Constructing the English Gentleman in Eighteenth-Century France', *History of Education* 21 (1992), pp. 241-57; 'Manliness, Effeminacy and the French: Gender and the Construction of National Character in Eighteenth-Century England', in Tim Hitchcock and Michèle Cohen eds., *English Masculinities 1660-1800* (London, 1999), pp. 44-61; Carter, *Men and the Emergence of Polite Society*, ch. 4. スプリング・ハルステッドの議論が『L'Esprit』文壇年表に記す語句などである。Mary Wollstonecraft, *A Vindication of the Rights of Men in idem A Vindication of the Rights of Men and A Vindication of the Rights of Woman*, ed. Sylvia Tomaselli (Cambridge, 1995), esp. p. 64.
- (80) Newman, *The Rise of English Nationalism*, ch. 4.
- (81) Caroline Robbins, *The Eighteenth-Century Commonwealthman: Studies in the Transmission, Development and Circumstance of English Liberal Thought from the Restoration of Charles II until the War with the Thirteen Colonies* (Cambridge, Massachusetts, 1959), ch. IV.

- (82) Robert Molesworth, *An Account of Denmark, as It was in the Year 1692* (London, 1694), p. 238. なお、アルジャーノン・シドニーは一六五九年、スウェーデンとデンマークに派遣された際、コペンハーゲンで次のような有名な一文を残した。「この手は暴君の敵なり。自由のもてでの静かな平和を望む」。Jonathan Scott, *Algernon Sidney and the English Republic, 1623-1677* (Cambridge, 1988), p. 133. モールズワースもこの挿話を紹介してゐる。Molesworth, *An Account of Denmark*, C3^v-4^r.
- (83) *Ibid.*, A5^v.
- (84) *Ibid.*, B3^v.
- (85) *Ibid.*, C3^r.
- (86) *Ibid.*, A7^v.
- (87) *Ibid.*, C3^{r-v}.
- (88) *Ibid.*, A6^r.
- (89) *Ibid.*, C3^r. モールズワースは一六九二年に特命使節としてデンマークに派遣された。しかしながら、そこでの彼の行動は、「おおよそ『文明の作法』とは程遠いものであった。すなわち、彼はコペンハーゲンの宮廷に『深刻な危害を加え、突如として、退出に必要な通常の儀礼的な手続きをせずにデンマークを去った』。さらに、彼に批判的な人物によれば、『モールズワースは国王の御猟場で禁じられている狩猟をしたり、王家の馬車のみに許される道路を通行するなど、不遜極まりなく、デンマーク流の礼節を踏みにじった』(DNB 13: 568)。 Cf. Robbins, *The Eighteenth-Century Commonwealthman*, p. 92.
- (90) *モーリスの経歴* (1717年) Sarah Brewer, 'Biography', in *idem ed., The Early Letters of Bishop Richard Hurd, 1739-1762* (Bury St Edmunds, Church of England Record Society, 1995), pp. x-xix. を参照した。
- (91) 以下、モーリスの著作からの引用は、すべてRichard Hurd, *Moral and Political Dialogues with Letters on Chivalry and Romance*, 3 vols. (London, 3rd ed., 1765; Farmborough, 1972) から行い、巻・頁の順で、すべて本文中に括弧で記した。なお、この『道徳・政治対話集』は一七五九年の初版から八八年までに六版(一七五九、六〇、六五、七一、七六、八八)を数えた。ダブリン版(六〇)の独訳(七五)もある。他方、同じ時期に『騎士道とロマンスに関する書簡』は二つの版(六二、六二)とダブリン版(六二)、『外国旅行についての対話』も同じく二つの版(六四、六四)とダブリン版(六四)が出版された。両作品ともに、六五年からは『対話集』のなかに収録された。『外国旅行についての対話』には仏訳(六五、六五)と独訳(六五、七七)もある。以上の書誌情報については、D. D. Eddy, *A Bibliography of Richard Hurd* (New Castle, Delaware, 1999) を参照した。
- (92) Shaftesbury, *Characteristics*, pp. 403-5.

- (93) こうして、とくに一八世紀後半以降、「イングランド」独自の「作法」の在り方が議論されるようになる。「ジェントルマン」の再定義とも運動した作法の再編については、たとえば、川北稔「イギリス風マナーの自立―イギリス人らしきの成立」、指昭博編『イギリス』であること―アイデンティティ探求の歴史』刀水書房、一九九九年、一〇一―一七頁。フィリップ・メイソン「英国の紳士」、金谷展雄訳、晶文社、一九九一年。また、このような議論の展開を、「イングランドの『非社交性』と関連付けた論文として」、Paul Langford, 'Manners and the Eighteenth-Century State: The Case of the Unsociable Englishman', in John Brewer and Eckhart Hellmuth eds., *Rethinking Levithan: The Eighteenth-Century State in Britain and Germany* (Oxford, 1999), pp. 281-316.
- (94) ウォリン『政治学批判』千葉真他訳、みすず書房、一九八八年、五頁。
- (95) ジャコバイト鎮圧後の国内旅行ブーム、湖水地方やアルプスなどの「景観」の発見、ワテルローの戦場巡り、トマス・ツクナなどの旅行者の登場はその一例である。Cf. Black, *The Grand Tour*, pp. 332-5.
- (96) Buzard, 'The Grand Tour and After', pp. 42-50. タウナーは、このような中産階級による家族旅行への変化を指摘し、「古典的タラント・ツナー」と対比させて、それを「ロマン主義的タラント・ツナー」と呼んだ。Townet, 'The Grand Tour', esp., pp. 312-3.
- (97) Newman, *The Rise of English Nationalism*; Colley, *Britons* (ロリー『イギリス国民の誕生』); また、国民意識の起源を中世にまで遡らせ、その「発明」ではなく「発展」を強調する議論がある。J. C. D. Clark, 'Protestantism, Nationalism, and National Identity, 1660-1832', *The Historical Journal* 43 (2000), pp. 249-76.
- (98) カント『美と崇高の感情にかんする観察』久保光志訳（『カント全集2 前期批判論集II』岩波書店、二〇〇〇年所収）、三七三頁。ただし、これはもちろん、イングランドへの旅行経験がないどころか、ケーニヒスベルクから三〇マイル以上外に出なかったカントによる「ステレオタイプ」の一例であろう。しかし、デモクラシーとナショナルイズムがともに、一般的に、このようなステレオタイプの動員を不可欠とすることもまた疑いない。
- (99) もっとも、これは作法それ自体の喪失を必ずしも意味しない。とくに一九世紀においては、作法を意味する語彙として、新たに *étiquette* という言葉が加わる。しかしながら、この過程において、作法はいわばマニュアル化され、その対象は中産階級以下にも拡がり、広く「家庭」「女性」に焦点が当てられる。このような一九世紀における作法の変質については、Michael Curtin, 'A Question of Manners: Status and Gender in Etiquette and Courtesy', *Journal of Modern History* 57 (1985), pp. 395-423; *Propriety and Position: A Study of Victorian Manners* (New York, 1987); Martorie Morgan, *Manners, Morals and Class in England, 1774-1838* (Basingstoke, 1994); サミュエル・スマイルズの *Self Help* は「新たな civilization の時代における、このような作法の国民的な再編の過程において解釈できるのではないか。

(100) ただし、イングランドの場合、とくにナショナルリズムについては重要な留保が必要である。なぜなら、「ナショナルリズム」の定義の難しさはもとより、イングランドは「ブリテン」という複合国家の一部であり、同時にまた、世界に植民地を有する「帝国」であったからである。とくに、イングランドは「大ブリテン帝国」の中心であったがために、逆説的に、他のスコットランドなどと比べて国民意識が伝統的に希薄であった、という議論がある。Kristan Kumar, *The Making of English National Identity* (Cambridge, 2003); Bernard Crick, 'The English and the British', in idem ed., *National Identities: The Constitution of the United Kingdom* (Oxford, 1991), pp. 90-104. また、このような「帝国」化に伴って、今度はインテラランドみずからが「文明」の担い手を標榜するようになる。このような文脈において「インテラランド化」された civility の、とくに第二次世界大戦後における最後の表明をした人物の一人が、おそらくアーネスト・バーカーであろう。Sir Ernest Barker, *Traditions of Civility* (Cambridge, 1948). このバーカーの政治思想を「インテラランド」意識の観点から分析した研究として、Jurja Stapleton, *Englishness and the Study of Politics: The Social and Political Thought of Ernest Barker* (Cambridge, 1994).

※本稿は平成一六年度文部科学省科学研究費補助金(若手研究B)による研究成果の一部である。